

東北大学創立百周年記念展



東北大学 生の 一世紀

1907 東北大学創立

1913 日本初の女子学生入学

1943 法文系学生の一斉入隊

1949 新制東北大学発足

1960 ボート部ローマ五輪出場

1969 大学紛争の激

2007 創

写真協力 河北新報社

東北大学史料館

東北大学は、一九〇七年六月に国内三つ目の大学「東北帝国大学」として誕生して以来、今年で創立百周年を迎えました。この一世紀の間に東北大学を卒業した学生は、学部学生で約十二万六千人にのぼり、大学院の修了者も約五万六千人となります。

創立百周年にあたり、東北大学史料館では、本学の歴史をご紹介します。一つの方法として、過去百年の間にこの東北大学で青春時代を過ごした学生たちの歴史をテーマにしたこの展示会を企画・開催することといたしました。東北大生の一世紀、それは二十世紀の大学生の歴史と重なるものです。明治以来「学都」と呼ばれた仙台の地に全国から集まった学生たちが、それぞれの時代環境のなかで、またこの東北大学のキャンパスの中で、何を感じ、どう生きたのか。東北大学史料館に集められた様々な資料を通じて、大生の歴史を見つめてみませんか。

二〇〇七年七月

東北大学史料館

目次

東北帝大の誕生と学生たち	3
帝大生の学生生活	5
戦争と東北大生	7
戦後復興と学生のチカラ	9
戦後社会の変化と東北大生	11
「トンペイ」学生の歳月	13

一九〇七	勅令第二三六号により東北帝国大学が設置される
一九一〇	専門学校卒業生等に対する入学資格開放を公表
一九一一	第一回入学宣誓式を挙げる
一九一二	自修会発足
一九一三	三人の女性に対する入学を許可(日本初の女性大学生)、東北帝国大学開学式挙げる
一九一四	第一回卒業証書授与式
一九一五	医科大学を設置
一九一九	工学部設置
一九二一	第一回東北帝国大学陸上大運動会を追廻練兵場で開催
一九二二	東北帝国大学学友会発足、三学部会および音楽部・文芸部・陸上競技部等九つの部が参加
一九二二	法文学部設置
一九二四	附属図書館図書閲覧室の完成(現在の史料館)
一九二五	新しい正門を片平丁にむかつて開く
一九二八	『東北帝大法文時報』発刊(最初の学生新聞)
一九二九	全学女子学生同窓会「芝蘭会」発足
一九三三	学友会解散、東北帝国大学体育連盟・文芸連盟発足
一九三三	京都帝国大学瀧川事件に伴う学生騒動
一九三六	片平丁北門外に創立二五周年記念会館建設
一九三七	評定河原運動場の建設
一九三七	『東北帝国大学新聞』発刊
一九三八	太田正雄教授による「鷗外の会」
一九三九	人民戦線派事件による教員・学生の検挙
一九四一	臨時附属医学専門部設置
一九四一	大学における軍事教練の必修化、東北帝大でも実技教練開始
一九四一	東北帝国大学報国隊設置
一九四三	卒業時期の繰り上げ開始(二月)
一九四四	法文系学生の一斉入隊、東北帝国大学出陣学徒壮行式
一九四五	学生の通年勤労働員開始
一九四六	仙台空襲により本学建物の三分の一を焼失(七月)
一九四六	終戦記念講演会(九月)
一九四六	旧制二高明善寮の一部を大学が譲り受ける
一九四七	東北大学生組合発足
一九四七	『東北大学生新聞』発刊
一九四七	農学部設置
一九四九	東北帝国大学を東北大学と改める
一九四九	第一回大学祭を開催
一九四九	法文学部を解体し法・経済・文学部を設置
一九五〇	国立学校設置法により新制東北大学発足
一九五〇	教育学部、分校第一・第二・第三教育教養部を設置
一九五二	第二高等学校・仙台工業専門学校・宮城県女子専門学校・宮城師範学校・宮城青年師範学校
一九五二	・附属医学専門部を包括・併合
一九五三	GHO民間情報教育局顧問イルズの講演をめぐり学内紛糾(イルズ事件)
一九五三	分校第三教養部(旧宮城女専校舎を使用)を第一教養部に統合
一九五七	新制大学院発足
一九五七	有朋寮開寮
一九五八	分校第二教養部を第一教養部に統合し富沢分校設置
一九六〇	分校教育教養部を北分校と改称
一九六〇	富沢分校・北分校を川内地区に移転し川内分校・川内東分校とする
一九六一	日米安保反対運動のデモ盛んに行われる
一九六二	ローマ五輪に漕艇部のエイトが出場
一九六二	創立五十周年記念講堂落成
一九六二	東北大学工業教員養成所設置
一九六五	国立七大学総合体育大会始まる
一九六五	工学部の青葉山地区への移転開始
一九六九	歯学部設置
一九七二	教員養成課程の分離独立
一九七三	青葉山地区への移転問題に関する全学ストライキ事件
一九七三	理学部の青葉山地区への移転開始
一九七三	大学紛争激化、全共闘系学生による教養部校舎等の封鎖
一九七三	薬学部設置
一九七九	文系四学部の川内地区への移転
一九八七	医療技術短期大学部設置
一九九〇	第一回国立公立大学共通一次試験実施
一九九二	国立大学二次試験への複数受験制導入
一九九三	大学入試センター試験開始
一九九三	二十三年ぶりに入学式を復活
一九九四	教養部の廃止、大学院国際文化情報科学研究科設置
一九九四	大学院重点化始まる
一九九六	東北大学新キャンパス構想発表
二〇〇一	大学院生命科学研究科設置
二〇〇二	大学院情報教育学研究部・教育部設置
二〇〇二	大学院環境科学研究科設置
二〇〇四	国立大学法人東北大学発足
二〇〇五	法科大学院・公共政策大学院設置
二〇〇七	会計大学院発足設置
二〇〇七	創立百周年

勅令第二三六号により東北帝国大学が設置される

専門学校卒業生等に対する入学資格開放を公表

第一回入学宣誓式を挙げる

三人の女性に対する入学を許可(日本初の女性大学生)、東北帝国大学開学式挙げる

第一回卒業証書授与式

医科大学を設置

工学部設置

第一回東北帝国大学陸上大運動会を追廻練兵場で開催

東北帝国大学学友会発足、三学部会および音楽部・文芸部・陸上競技部等九つの部が参加

法文学部設置

附属図書館図書閲覧室の完成(現在の史料館)

新しい正門を片平丁にむかつて開く

『東北帝大法文時報』発刊(最初の学生新聞)

全学女子学生同窓会「芝蘭会」発足

学友会解散、東北帝国大学体育連盟・文芸連盟発足

京都帝国大学瀧川事件に伴う学生騒動

片平丁北門外に創立二五周年記念会館建設

評定河原運動場の建設

『東北帝国大学新聞』発刊

太田正雄教授による「鷗外の会」

人民戦線派事件による教員・学生の検挙

臨時附属医学専門部設置

大学における軍事教練の必修化、東北帝大でも実技教練開始

東北帝国大学報国隊設置

卒業時期の繰り上げ開始(二月)

法文系学生の一斉入隊、東北帝国大学出陣学徒壮行式

学生の通年勤労働員開始

仙台空襲により本学建物の三分の一を焼失(七月)

終戦記念講演会(九月)

旧制二高明善寮の一部を大学が譲り受ける

東北大学生組合発足

『東北大学生新聞』発刊

農学部設置

東北帝国大学を東北大学と改める

第一回大学祭を開催

法文学部を解体し法・経済・文学部を設置

国立学校設置法により新制東北大学発足

教育学部、分校第一・第二・第三教育教養部を設置

第二高等学校・仙台工業専門学校・宮城県女子専門学校・宮城師範学校・宮城青年師範学校

・附属医学専門部を包括・併合

GHO民間情報教育局顧問イルズの講演をめぐり学内紛糾(イルズ事件)

分校第三教養部(旧宮城女専校舎を使用)を第一教養部に統合

新制大学院発足

有朋寮開寮

分校第二教養部を第一教養部に統合し富沢分校設置

分校教育教養部を北分校と改称

富沢分校・北分校を川内地区に移転し川内分校・川内東分校とする

日米安保反対運動のデモ盛んに行われる

ローマ五輪に漕艇部のエイトが出場

創立五十周年記念講堂落成

東北大学工業教員養成所設置

国立七大学総合体育大会始まる

工学部の青葉山地区への移転開始

歯学部設置

教員養成課程の分離独立

青葉山地区への移転問題に関する全学ストライキ事件

理学部の青葉山地区への移転開始

大学紛争激化、全共闘系学生による教養部校舎等の封鎖

薬学部設置

文系四学部の川内地区への移転

医療技術短期大学部設置

第一回国立公立大学共通一次試験実施

国立大学二次試験への複数受験制導入

大学入試センター試験開始

二十三年ぶりに入学式を復活

教養部の廃止、大学院国際文化情報科学研究科設置

大学院重点化始まる

東北大学新キャンパス構想発表

大学院生命科学研究科設置

大学院情報教育学研究部・教育部設置

大学院環境科学研究科設置

国立大学法人東北大学発足

法科大学院・公共政策大学院設置

会計大学院発足設置

創立百周年



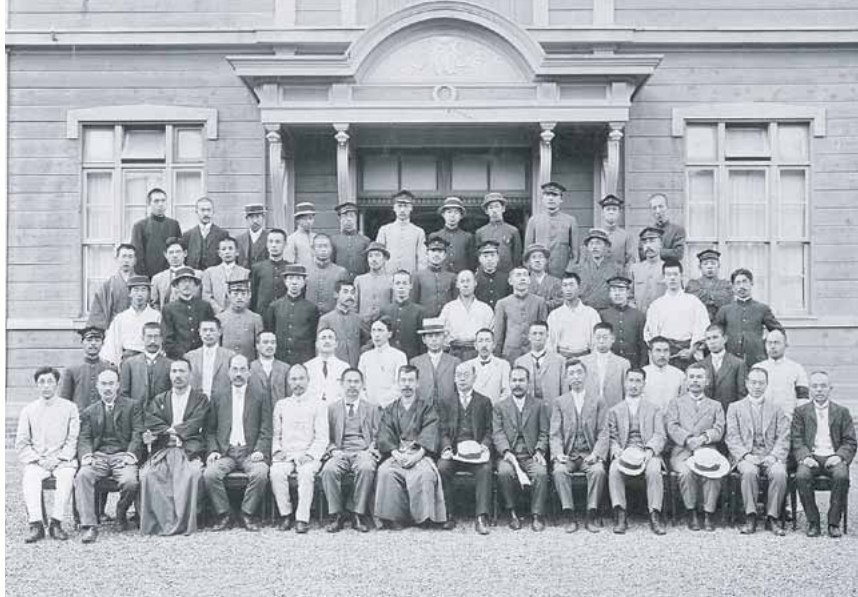
東北帝大の誕生と学生たち

東北大学は、東京・京都に続く三つ目の大学「東北帝国大学」として一九〇七年に誕生した。もっとも実際にこの年に発足したのは札幌農学校を改組した農科大学（北海道大学農学部の前身）のみであり、仙台に新設される理科大学で学生達が学び始めるのは、更に四年の準備期間を経た、一九一一年九月のことであった。

三番目、しかも理科という学生を集めにくい分野からスタートした仙台の東北帝国大学は、一期生の募集に際し、これを逆手に大胆な戦略に出た。当時の帝国大学は事実上旧制高校の卒業者のみに入学が許されていたが、東北帝大ではこの規制を緩和し、これと同等の水準と認定した専門学校や高等師範学校の卒業者、さらには中等教員免許所持者等に対しても受験資格を認め、より広い範囲から学生を募ったのである。

この「門戸開放」により理科大学には高校を出た若人から四〇過ぎの紳士まで、向学心に燃えた、バラエティに富む学生が集まり、東大・京大とはまた異なる独特の風土を創り出した。それはまた、一九一三年に日本初の女子学生をこの大学に誕生させ、仙台の地から女性科学者のパイオニアを産み出していく下地にもなった。

こうして学部仙台に集った科学青年たちが、新大学への期待に溢れ仙台へ赴任してきた気鋭の研究者たちとともに、この生まれたての大学に「学術第一」の学問風土をつくりあげていったのである。



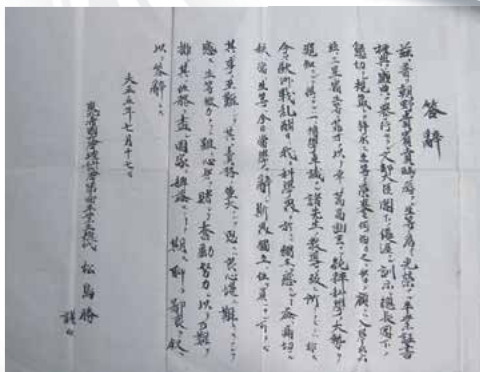
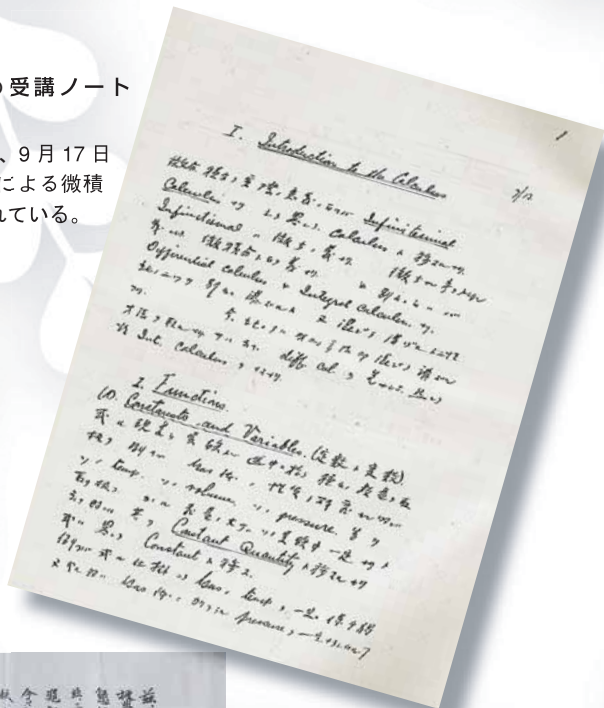
理科大学第一回卒業生と教官たち（1914年7月）

第一回の卒業生は合計23人。傍系入学の学生の中には30代以上の者も少なくなく、最高齢の学生（入学当時47歳）は数学科の窪田助教授の中学時代の恩師であった。卒業生の半数はのち大学や旧制高校等の教員として活躍し、その他の多くは官庁や企業の技術者として活躍した。

写真では後3列に学生、前2列に教職員が並ぶ。前列は左から小林松助（化）、窪田忠彦（数）、掛谷宗一（数）、真島利行（化）、日下部二郎太（物）、本多光太郎（物）、林鶴一（物）、北條時敬（第二代総長）、小川正孝（理科大学長・化）、片山正夫（化）、矢部長克（地）、岩崎重三（地）、石原純（物）。二列目にも小倉金之助（数・左から二人目）、田辺元（哲学・同四人目）といった面々の顔が見える。

理科大学最初の授業の受講ノート（1911年9月）

理科大学は最初の授業は、9月17日に行われた、林鶴一教授による微積分の講義であったと言われている。



第三回卒業式の学生総代答辞（1916年7月）

「今や欧州大戦酣日、我科学界に於ける独立を感ずること益に痛切なる秋に当り」云々と、第一次大戦に際し日本の科学界が自立する必要を説いている。



医科大学の授業風景（1917年頃）

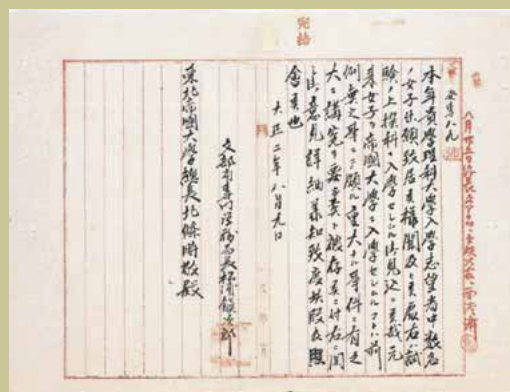
細菌学実習の風景。1915年に発足した医科大学（のちの医学部）では、高等学校医科進学コースに限らず理科コースの出身者にも門戸をひらいた。



工学部の正門前で（1920年頃か）

場所は現在のさくらホール付近。工学部でも理科大学同様高等工業学校等の出身者に門戸を開き広く学生を募集した。岡部金治郎・松前重義等の人々が、こうした門戸開放の結果東北帝大に入学している。

日本初の女子大生



女子入学に関する文部省の照会状（1913年8月）

四人の女性に独自の判断で理科大学受験を認めようとする東北帝国大学の方針に対し、「元来女子を帝国大学に入学せしむることは前例これ無事にて頗る重大なる事件にこれあり大に講究を要し候」云々と警告した文書。大学側はそのまま入学試験を実施し、1913年8月16日に三名の女子学生（写真左から黒田チカ、牧田ラク、丹下ウメ）の合格を発表。日本初の女性大学生がここに誕生した。



自修会発会式での記念撮影（1913年5月）

自修会は理科大学の教職員学生の親睦組織（学友会）。場所は現在の西公園。初代総長澤柳政太郎（前列中央ステッキを持つ人物）以下、当時の理科大学の教職員と一期・二期生の学生が並ぶ。和服姿の学生が目立つ。



東北帝国大学法文時報 52号 (1932年)
法文学部の学友会が発行した学生新聞。全学的な新聞として広く読まれたが、学生思想に対する統制が強まる中、掲載内容をめぐり学生課と学生たちが対立、学生同士の意見の対立もあり1932年に廃刊となった。



芝蘭会での記念撮影 (1933年頃)
芝蘭会は、中村多麻等を中心に結成された女子学生の会。写真の場所は、当時学生達の会合場所としてよく使われた東一番丁の明治製菓。



「鷗外の会」に集う医学部生たち (1937年)
太田正雄 (木下圭太郎) が開いた「鷗外の会」に集った学生たちは、太田の東京帝大に転出に際しその留任運動を展開した。「鷗外の会」はその後法文学部の河野與一を中心に継続されたが、特高警察による監視が強まりやがて解散となる。(写真提供 神奈川近代文学館)



学生集会所にて (1938年頃)
片平キャンパス北門外、現在の北門食堂の場所には、創立二十五周年を契機に記念会館が建てられ、教官・学生の憩いの場として使われていた。

医科学・工学部、法文学部といった学部の新設に伴い、東北帝大に学ぶ学生は正期を通じて増え続け、昭和初期にはその数は一五〇〇人を超えた。こうした中で、それまで各学部を単位とする形で展開されていた学生の活動も再編され、一九二〇年代には東北帝国大学学友会の発足に伴い全学的な文化・スポーツ団体が次々と誕生した。運動部は東北帝大の代表選手として他大学との対抗戦を始め、文芸部・音楽部も文芸講演会や演奏会等を積極的に開催した。一時途絶えていた女性の入学も一九二〇年代以降は継続的に見られるようになり、全学女子学生同窓会として「芝蘭会」も発足している。

教師と学生たちとの深いつながりもまた、帝大の学生生活の特色であった。当時多くの教授たちには自宅面会日があり、学生達はそれぞれ教師と仰ぐ教師の自宅を訪ねては語らいの場を持った。大正教養主義の代表的存在と言われる法文学部の阿部次郎や小宮豊隆の面会日には、文系理系を問わず様々な学生が集まり、文芸・哲学等について深夜に及ぶ語り合いが続けられたという。

一方で昭和初期は様々な社会不安のなかで、思想問題が学生社会の中でも大きな問題となり、東北帝大でも学生の検挙事件が幾度となくおこっていた。一九三七年初頭には、木下圭太郎のペンネームで知られる太田正雄のもとで、こうした学生たちを集めて「鷗外の会」なる読書会が開かれている。左傾学生の「思想善導」という建前で開かれたこの会も、その実質は鷗外の作品を通じヒューマニズムを学ぼうという「教養」の会であった。



東北帝国大学音楽部主催特別演奏会 (1925年) と1937年定期演奏会のパンフレット
全学学友会発足に際し、岡部金治郎ら音楽好きの学生有志16名が発起人となり東北帝国大学音楽部が発足した。写真左から2番目は、音楽部草創期に常任指揮者として活躍した、文学者陶晶孫としても名が知られる中国人留学生・陶熾。



理・医・工学部の学友会誌
各学部学友会が発行する自修会報 (理学部)・長陵 (医学部)・工明会誌 (工学部) といった会誌は、学生たちの文芸・言論活動の場でもあった。

東北帝大生の生活実態アンケート (昭和10年) ※数値は百分率

住居	スポーツ	趣味娯楽	購読雑誌	信奉する主義	崇拜する人物
自宅通学 17.4	庭球 31.8	囲碁 27.6	中央論 24.0	人道主義 18.9	西郷隆盛 8.8
下宿 62.0	野球 24.2	映画 22.0	改造 15.8	自由主義 14.4	野口英世 5.8
借家等 20.6	卓球 13.3	音楽 21.0	文藝春秋 14.6	日本主義 12.6	本多光太郎 4.5

戦争と東北大生

一九三七年の日中戦争の開始以降、学校教育の場でも、集团的勤労作業や出征者遺家族の慰問など、戦争遂行のための奉仕活動が導入され戦時色が次第に深まってくる。一九四一年には防空訓練や学徒動員等の際の学生動員組織となる「東北帝国大学報国隊」が設置されている。

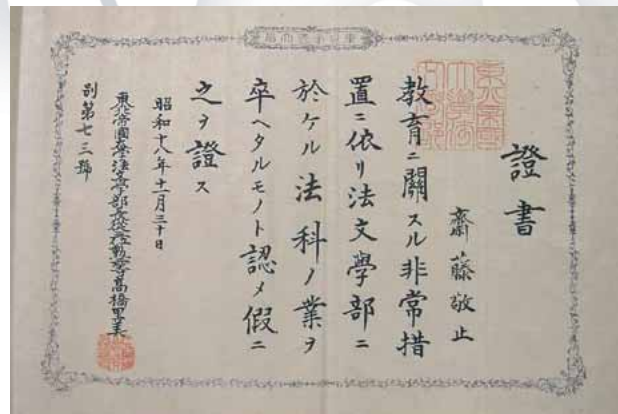
当時の大学生（男子学生）は、兵役法の特例規定により徴兵年齢に達したあととも兵役に就くことを猶予されていた。同年代の若者たちが戦場に駆り出されていくなかでも、学生たちは学問に、課外活動にと青春を費やすことを許されていた。それは、国家のエリートである大学生に与えられた「特権」であった。しかしそうした特権も戦局の悪化とともに失われていく。対米英戦争の始まった一九四一年十二月には大学生の卒業時期が三ヶ月繰り上げられ、翌年からは繰上期間が半年に拡大された。そして一九四三年十月には遂に大学生の在学中の徴集猶予措置が撤廃され、徴兵年齢に達し検査に合格した法文系学生は十二月上旬に一斉に陸海軍に入隊する。いわゆる「学徒出陣」である。東北帝大ではこの時七六七名の学生が学業を離れ軍隊に入り、その後昭和二〇年八月に至るまで次々と学生達が入隊していった。総数は判明していないが、少なくとも八〇名以上の戦没学生が確認されている。

戦場に出ることを免除されていたその他の学生にも、別な形で戦争が待っていた。一九四四年には、決戦非常措置要綱に基づき大学でも工場等への学生の勤労動員が年間を通して行われるようになり、文・理を問わず上級生から順次、戦時労働力として軍需工場や戦時研究施設等に動員されていった。

動員中の法文学部学生の合作による回覧文集「春樹集」には、ある学生の悲痛な叫びが記されている。「慰問の手紙を書けと言はれたが、その時俺は自分の耳をうたがった果たして俺にはそんなヨイウがあるだろうか」と無



東北帝国大学出陣学徒壮行式（1943年10月8日）
片平地区の中央講堂前（現・さくらホール付近）にて約2000名を集めて行われた。（写真提供 河北新報社）



法文系学生の一斉入隊に際し、最高学年に属する学生に授与された仮卒業証書（1943年12月）
彼らの多くは、そのまま大学に戻らずに、一年後にはそのまま卒業扱いとなった。



春樹集
軍需工場に動員された法文学部生たちがつづった手書きの回覧文集。題字は阿部次郎の筆。



仙台市苦竹の陸軍造兵廠に動員されていた学生たちの記念撮影（1945年6月）



法文学部経済科の教員と学生（1938年頃か）
前列に軍帽・ゲートル姿の教員を見ることができる。



東北帝国大学学徒隊看板
法文学部生の動員先の一つである志太村（現大崎市）で掲げられていた看板。学徒隊は戦争末期の1945年5月の「戦時教育令」に基づき、勤労動員先などで学校単位に結成された組織。本土決戦の際には戦闘部隊となることが想定されていた。



青葉山護国神社での勤労作業（1939年）



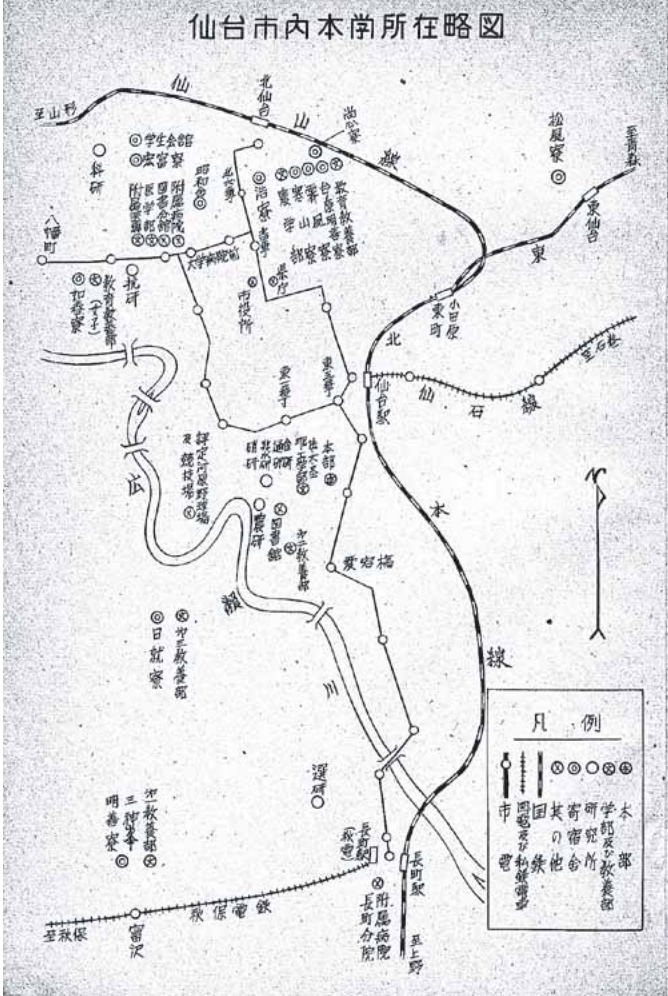
徽章入りの鉄兜
防空訓練や空襲避難時に使われた

戦後復興と学生のチカラ

一九四五年九月、空襲で屋根に穴の空いた法文学部の講義室で、十日間にわたり「終戦記念講演会」が開催された。途絶えていた授業は一〇月から再開されることとなり、動員先や戦地から帰ってきた学生、あるいは軍関係の学校から転学してきた学生たちで、静かだった大学は一気ににぎわいを取り戻していく。

食糧不足・物資不足と猛烈なインフレーションのなか、学生達の生活も困難を極め、様々なアルバイトが行われた。学生生活に必要な物資の確保のために「学生組合」が発足し、片平キャンパスの正門付近には学生達の手で「いてふ」という喫茶店が開店。学生たちの文化・スポーツ活動も徐々に盛んとなり、戦前を上回る多数の学生団体が、他の在仙学校の学生達とも協力し合いながら立ちあげられていく。それはまた、戦後仙台の文化復興を推進する原動力でもあった。

そうしたさ中に進められていた戦後の教育改革により、東北帝国大学は一九四七年に東北大学へと名称を変更。そして一九四九年には学制改革により新制の東北大学が誕生する。新学制の施行により、東北大学のカリキュラムも専門教育を行う後期二年と一般教育を担当する前期二年の課程に再編され、この前期課程の場として、旧制高専校・師範学校のキャンパスを引き継いだ四つの分校が設けられた。教育教養部を除く三つの分校はやがて旧制第二高等学校から引き継いだ富沢地区を核に統合され、多くの学生が二年間をここで過ごすこととなる。旧制高校で培養された独特の学生文化が、東北大学の中に溶け込み、その中から戦後の新たな学生文化が生まれてくるのである。



仙台市内のキャンパス分散状況（昭和26年度学生便覧より）
農学部の設置と新制大学発足による諸学校の包括併合により、東北大学の学生が学ぶキャンパスは、最大で七箇所分散。この他に市内の映画館を「第四教養部」として数える学生もいたとか。



在外同胞救出仙台学生同盟のメンバー（左）と
仙台駅前同盟事務所（右の写真は仙台市戦災復興記念館所蔵）
1946年2月、東北帝大・二高・女専や宮城学院・東北学院など、在仙大学・高校・専門学校等の学生・生徒によって結成された。仙台駅前に学生たちが交替で常駐して引揚者の世話等に当たっていた。



片平構内でコンサートチケットを売る学生たち
宮城学院講堂で行われる学校協同組合文化講座でのピアノ演奏会のチケット販売。



文芸部の同人誌 東北大文芸部『象形』創刊号（1952年）
学生たちの自由な文芸活動も息を吹き返し、新制大学発足の頃から学生たちの文芸誌も次々と創刊された。こうした学生文芸誌は、新人発掘の場として文壇からも注目されていた。（佐々木靖章氏提供）



イールズ事件に抗議する学生集会（1950年5月）
1950年5月、大学からの共産主義者追放を主唱するGHQ民間情報教育局顧問W.C. イールズが本学で講演会を開催したが反対学生たちの質問が飛び交うなかで流会。4名の学生に逮捕状が出される事件になった。写真はこれに抗議する学生たちが本部で行った集会。（写真提供 仙台市戦災復興記念館）



東北学生新聞
1946年6月に創刊された学生新聞。当初は東北大学のみならず在仙の他学校、さらには東北各地の学校とも協力し東北地域の学生新聞として編集・発行されていた。のち『東北大学新聞』と改称。

明善寮天井の落書き
戦後に旧制二高から東北大が引き継いだ「明善寮」の壁や天井には、寮生の手で記された墨書の檄文等がひしめいていた。新制大学の寮生もこれを眺め、さらに多数の文を加えていった。（この旧寮は1981年に建て替えられた）



第一教養部の校舎前で（1950年）
文学部進学予定の新制大学第一回生。女子学生の顔も多い。旧制第二高等学校（二高）の校舎を引き継いだ校舎の正面玄関の上にはまで二高の校章である「蜂」が飾られている。学生たちの後ろにある通称「栗野観音像」は、旧制二高随一の名物教授・栗野健次郎の退官に際し作られたもので、その後川内キャンパスを経て、現在は最初の建立地である雨宮キャンパス内に鎮座している。

戦後社会の変化と東北大生

一九六〇年代の到来を漕艇部のローマ五輪出場という快挙で飾った東北大学は、戦後社会の急激な変化の中で大きく変化していった。

一九六〇年前後から本格的な展開を見せ始めた高度経済成長は、生活水準の向上に伴う大学志願者数を増やし、同時に理工系学生に対する大量の需要を産み出した。大学の大衆化が進む中、東北大学でも工学部を中心に学生数が増加をみせていく。

東北大学のキャンパスもこうした動きの中で装いを新たにしていた。一九五八年には米軍から返還されたばかりの川内地区に教養部が移され、当初米軍兵舎のバラックを使用していた校舎も六〇年代後半には現代的な鉄筋コンクリートの校舎へと生まれ変わった。片平地区の各学部も同じ頃から順次川内・青葉山地区へ移転し、七〇年代の半ばまでには医・歯・農を除く多くの学生が、このキャンパスで学生生活を送るようになる。

様々な紛争事件で大学が揺れ動いたのもこの時代である。東北大学では一九六五年の青葉山移転問題等において大規模な学生ストが発生し、大学の自治や管理運営のあり方をめぐる全学的な「改革」議論の契機となった。一方東大紛争を頂点とする全共闘運動の影響下で発生した一九六九年の紛争では、主な争点となった「大学の運営に関する臨時措置法」への反対表明が各方面からなされる一方で、教養部を中心に全共闘系の学生による校舎封鎖が多発し、またこれに反対する党派との暴力的な抗争が頻発。こうした混乱は授業の停止や、学習環境の破壊など、「一般学生」の学生生活にも深刻な影響を及ぼす結果となった。

機動隊導入による教養部の封鎖解除（1969年11月23日）
理科学研究棟の攻防戦を眺める教職員・学生達。東北大学の紛争は、東大安田講堂の攻防戦以後紛争が全国的に拡散するなかで、1969年にピークを迎えた。5月に全共闘学生によって封鎖された教養部理科学研究棟は、約半年にわたり維持され続けたが、11月に機動隊によって封鎖が解除された。（写真提供 河北新報社）



大学紛争時のアジビラ集
紛争期には、様々な立場の団体によっておびただしい数のビラが学内にばらまかれた。その一部は何人かの手によって収集され、東北大学史料館にも保存されている。



仙台駅前で行われた日米安保反対のデモ行進をする学生たち
全国的な大衆運動となった1960年の日米安保反対運動の際には、仙台でも大規模なデモや集会が繰り返され、多くの学生たちがこれに参加した。



東北大学漕艇部エイト ローマオリンピック出場
1960年5月、オリンピック選考会で日本初の2000メートル5分台をマークした東北大エイトが優勝し、見事五輪出場の夢を果たした。選手のなかで高校時代の経験者は一人。他は全て大学入学後にボートに乗り始めた学生たちであった。（写真提供 河北新報社）



大学祭のパンフレット
大学祭は当初校友会の主催行事として実施されていたが、1960年代の半ばから、「大学祭実行委員会」を主催者とするかたちで行われるようになった。



合格発表風景（1974年）
片平構内での合格発表に多くの受験生が殺到し、悲喜こもごもの風景が映し出される。この光景も現在では見られなくなった。



教員養成課程分離・青葉山移転問題に対する抗議集会
1965年、教員養成課程の宮城教育大学としての分離独立や農学部、青葉山移転等の問題をめぐり、学内が混乱。10月には大学運営のあり方に抗議する全学学生大会に数千人の職員・学生が参加する事件となった。



工学部生の実験風景（1960年頃）
高度成長下の科学技術政策の一環として、理工系学生の定員が増加。東北大でも工学部を筆頭に理工系学生の数が順調に増えていった。



学生食堂でくつろぐ学生たち（1962年頃）



東北大学国際まつり(1992年)
三条町の国際交流会館にて、1986年から行われている、留学生たちによるイベント。毎年国際色豊かな企画が行われている。2007年には留学生・日本人学生が入居する新しいタイプの寄宿舍「ユニバーシティ・ハウス三条」が開館し、学生達の国際交流も急速に進んでいる。



合格発表(1988年 片平)



入学式(1992年)
1969年におこった入学式での活動家学生による壇上占拠事件等を契機に、東北大学では70～80年代を通じて入学式が行われていなかった。92年に行われたこの入学式は実に23年ぶりのものであった。



学章・学生歌等制定式にて(2007年6月)
創立百周年を迎えた東北大学は、萩をモチーフにした新しいデザインのロゴマークを校章に制定するとともに、半世紀以上にわたって歌い継がれてきた「青葉もゆるこのみちのく」をあらためて学生歌として制定した。



卒業式(1991年)
卒業証書の受領に際し学生達が展開した様々な演出は、賛否両論あったものの、当時の風物詩の一つであった。



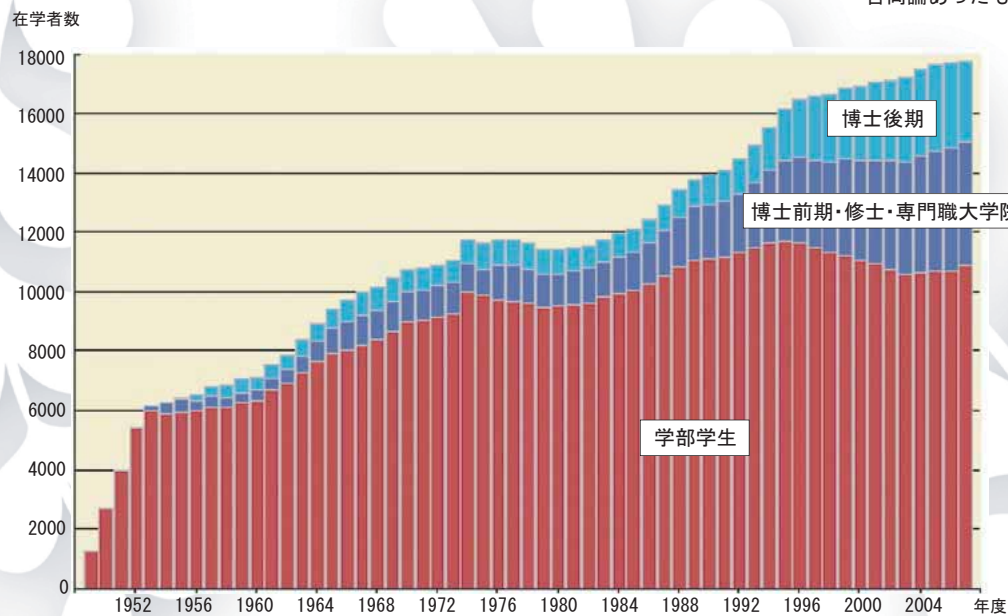
新入生でにぎわう川内北キャンパスの風景(1993年)

大学紛争が沈静化した七〇年代後半から八〇年代にかけての学生たちにとって、受験勉強から解放された直後に過ごす教養部時代は、部活やサークル活動に、あるいはアルバイトにいそむ中での「自分さがし」の時間であった。当時の学生新聞によれば、四月に学生達で賑わった教養部の各教室は、五月になると多くの学生が「行方不明」となり静かになると言う。そうして各々のスタイルで教養部生活を満喫した学生は、やがて各々の学部へと分散し、卒業だ、就職だと言っては、打って変わったように忙しい日々を送ったのである。

「いまだき」のトレンドとは距離を置いた、垢抜けないタイプの東北大生をさす「イカトンペイ」にも東北大生(トンペイ)といった言葉も、どうやらこの時代に使われ始めたものらしい。大学生のあり方が変化する中で、古典的な学生を揶揄した言葉であるが、それはまた、流行に左右されない東北大生の集団的な自意識とも言うことがきよう。

こうした学生たちをめぐる環境は、九〇年代以降大きく変化を遂げてきている。一九九三年には教養部が廃止され、カリキュラムも四年間の一貫教育という観点により大きく再編された。AO入試や推薦入試など入学試験のあり方も多様化した。また独立大学院の設置・既存大学院の整備拡充(いわゆる大学院重点化)に伴い大学院生の数は八〇年代以降急激な増加を続け、現在では全学生数の四〇パーセント近くを占めている。外国人留学生数も増加し、違う国籍の学生が机を並べることも日常の風景となった。

東北大学には現在、学部・大学院あわせておよそ一万八千人もの学生が学んでいる。学生の気質も次第に変化しつつある。しかし青春の時を過ごす学生たちのエネルギーは、今も変わらない。



新制大学発足後の在学者数
(旧制の学生は除く)
戦後の東北大学の学生数は、新制発足時を除くと、1960-70年代初頭と、1980年代末以降に顕著な増加を見せている。前者は学部学生数が主体であったが、後者の伸びは大学院生が主体となっている。

東北大生の生活実態(2002年度学生生活調査より。対象は学部学生。数字は百分比)

サークルへの参加	体育会系 35.3	文化系 15.7	音楽系 7.4	加入したがやめた 23.0	加入したことがない 35.3
教官との接触	学業以外でもよく話す 14.8	学業・進路について話す 28.0	殆ど話しをしない 38.2	全くしない 18.9	
休日の過ごし方	休養・睡眠 16.6	買物・家事手伝等 13.2	勉強・読書・研究 12.8	テレビ・ラジオ 10.0	パソコン・ゲーム 7.9
アルバイト(上位のみ)	家庭教師 41.6	軽労働 38.4	特殊技能等 10.6	事務 6.5	
大学生活への満足度	大変満足 7.9	満足 45.0	どちらともいえない 31.8	不満 11.0	大変不満 4.3
悩み(上位のみ)	将来の進路 31.3	学業 17.2	性格・能力 10.5	経済的問題 7.6	恋愛 6.9



川内北キャンパスの風景(2007年)



東北大学創立百周年記念展 **東北大生の一世紀**

平成 19 年 7 月 編集・発行 東北大学史料館

〒 980-8577 仙台市青葉区片平 2-1-1

Tel. 022(217)5040 Fax. 022(217)4998 URL <http://www.archives.tohoku.ac.jp>

資料協力／河北新報社 神奈川近代文学館 仙台市戦災復興記念館

